

厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）
分担研究報告書

-3. ユーザ側とモノ作り側（研究・開発・行政）の情報交換のあり方について

研究分担者 小野栄一

国立障害者リハビリテーションセンター研究所 障害工学研究部長

ユーザ側（障害当事者、医療福祉従事者）とモノ作り側（研究・開発・行政）がお互いの当り前を知り、効率よく実用的なモノの開発・普及につなげるための場をどのようにしたら良いかをそのあり方を探ることを目的とし、話題提供とフリーディスカッションする場を設けた。司会を障害当事者が行い、適切な情報提供のもと、歴史的な経緯から最新の支援技術の紹介とフリーディスカッションは、とても、有意義な場となることがわかった。また、そのような場が極めて重要であり、継続的な開催が望まれる。

A. 研究目的

ユーザ側（障害当事者、医療福祉従事者）とモノ作り側（研究・開発・行政）がお互いの当り前を知り、効率よく実用的なモノの開発・普及につなげるための場をどのようにしたら良いかをそのあり方を探ることを目的とする。

B. 研究方法

障害当事者側の課題を聞き、物作り側が支援機器に関連する技術の一端を紹介し、その後、どういう物があったら良いかに関して、自由に意見交換、質疑応答する場をもうけることで、情報共有の促進の進め方を探る。

C. 研究結果と考察

福祉工学カフェとして趣旨に沿った場を提供した。聴覚に障害のある渡辺儀一氏の司会で、就労や支援機器開発などにおける、障害当事者の視点から観た課題と解決法を

探るといふ趣旨説明を行い、長野裕美氏、瀬川由紀子氏、岡田浩彰氏の3人より聴覚障害を持つ当事者の発表（職場や生活環境での課題、苦勞、要望、技術的な面など）、続いて元筑波技術大学の学長で、現在は東京大学先端科学技術研究センターの特任研究員でもある大沼直紀先生より「聴覚補償から情報保障へ」と歴史的な話から、iPS細胞まで、具体的な数字や話を交えて幅広く話題を、さらに筑波技術大学の三好茂樹先生から、通信技術を用いた最近の遠隔情報保障について講演していただいた。

その後、休憩を挟んで活発なフリーディスカッションがなされ、多くの当事者側含む参加者からの質問、コメントがあり、大沼先生、三好先生への具体的で身近な課題に関する質疑応答も含め、貴重な話が伺えた。

時間的に話しきれないこともあり、福祉工学カフェが終わった後に両先生に対する質疑応答も長く続いた。

司会が障害当事者であることで、障害

を持つ人が積極的に発言をしやすかったと思われる。また、2先生が情報保障(手話通訳、要約筆記)に慣れた話し方をされたので、よりスムーズにコミュニケーションが進んだと思った。

話の内容が、生活・仕事に密着した話題、歴史的なことから最新の科学・技術の話題まで広く、一般のモノ作り側の参加者からもとても好評であった。現状の課題を、具体的に体験から基づき、説明され、質疑応答にも具体的に回答が得られ、課題に潜む歴史的背景など、当事者と当事者をよく知る人が、いっしょになると深い話が、物づくり側も聞きやすいと思う。また、実際に支援機器として実用に供している研究の話題は、当事者も高い関心を持って聞けると思う。

障害当事者が物作り側に話す機会が少ないので、このような場は貴重であるというコメントがあった。また、初めて参加した行政(物づくりに関わる)の人も参考になったということであった。

引き続き、継続的にこの場を持ってほ

しいという当事者側からのコメントがあった。

障害を持つ人とモノ作り側の人が集まったのフリーディスカッションを通じた情報共有できる場がまだまだ少ないと思われる。

D . 結論

障害を持つ人とモノ作り側の人気が楽にコミュニケーションできる場が、支援機器の効率的な開発・普及には、極めて大切で、継続的に持たれることが望ましい。その際、当座は、公的な機関が場の提供を応援するのが進めやすいと思う。

E . 参考文献

1)福祉工学カフェ URL : 2014/3/31 現在
http://www.rehab.go.jp/ri/event/at_cafe2010/top.html